

勝賀城跡

1979・3

高松市教育委員会

(題字は伊藤教育長)

序

近年、全国的傾向として文化財に対する関心が高まり、本市においても、文化財の保護活用ならびに愛護思想普及のため種々の施策を実施いたしているところであります。

今回、その一環として、高松市教育委員会では、中世讃岐の豪族香西氏の山城、勝賀城跡を、国・県の補助金をうけ、測量ならびに試掘調査を実施いたしました。調査は、来年度も引き続き予定しておりますが、この報告書は本年度の調査結果をまとめたものであります。

本報告書が、今後の城郭研究の一助となり、また文化財の保護活用に多少なりともお役にたてば幸いに存じます。

なお、本調査にあたり、勝賀史談会をはじめ地元佐料地区の方々や香川県青年ユネスコ連合、高松ユネスコクラブ、ならびに高松一高地歴部など、ご協力をいただいた関係各位の努力と労苦に対し、心から感謝の意を表するものであります。

昭和54年3月

高松市教育委員会

教育長 伊藤栄四郎

例 言

1. 本書は、高松市教育委員会が昭和58年度における国庫及び県費補助を得て実施した高松市鬼無町・香西西町・植松町・中山町に跨る勝賀城跡（中世山城跡）の確認調査報告書である。
2. 調査の実施に際して勝賀城跡調査団（団長伊藤栄四郎）が編成され、調査は城跡の全体を図化する地形測量（二百分の一縮尺）と本丸跡の状況を把握する試掘調査を行なうものとし、地形測量については株式会社南海コンサルタントに業務委託した。
3. 調査の期間は、業務委託の地形測量が昭和54年1月中旬～3月中旬、本丸跡の試掘調査及び周辺部の踏査が2月18日～24日までである。
4. 調査は、主として松本豊胤調査委員の指導のもと秋山忠・伊藤憲二・藤井雄三が担当したが、地元鬼無町佐料の有志から多大の協力を受けた。
5. 調査資料の整理作業では、川田洋子・池内万知子・中城富規（以上四国学院大学生）、篠原智子（高松市円座町）、成瀬衣代（坂出市旭町）の補助を得た。
6. 本書の執筆は、（城主香西氏の略年譜）を藤井雄三と共同執筆したほかは秋山忠が担当し、編集も合わせ行なった。

勝 賀 城 跡 調 査 団

團 長	高松市教育委員会教育長	伊 藤 栄 四 郎
副團長	〃 文化振興課長	上 里 文 廉
調査委員	香川県教育委員会文化行政課係員 高松市文化財保護委員長	松 本 豊 崑
	〃 委員	市 原 雄 士
	〃 "	小 竹 一 郎
	高松市教育委員会文化振興課係員	六 車 恵 一
調査員	香川県教育委員会文化行政課文化財専門員 高松市教育委員会文化振興課員	豊 島 英 夫
	"	秋 山 忠
		伊 藤 憲 二
		藤 井 雄 三

本 文 目 次

I 調査の経過	1
II 城跡の位置	2
III 城主香西氏の略年譜	4
IV 城跡の概要	5
1. 遺構の概況	6
2. 繩張について	16
V 本丸跡試掘調査	18
1. 試掘区の設定	18
2. 試掘区の状況	19
3. 遺物について	20
4. 調査の所見	21
VI 周辺主要城跡の概要	30
1. 佐料城跡の概況	30
2. 作山城跡の概況	34
3. 藤尾城跡の概況	35
4. 芝山城跡の概況	38
VII おわりに	40

挿 図 目 次

図 版 目 次

第1図 城跡探訪会風景	1	表紙 聰賀山近景（南東山麓佐料山田池より）… 48
第2図 聰賀城跡と周辺主要城跡	2	図版 1 (1) 本丸跡の龍神祠(東より) ……………… 45 (2) 龍神祠より本丸木戸を見る ……………… 45 (3) 本丸木戸（外側東より）…………… 45
第3図 聰賀山遺蹟（南東市町より）	3	図版 2 (1) 三の丸跡から本丸・二の丸跡を望む… 46 (2) 本丸土塁基部の石壘露出部分…………… 46 (3) 本丸土塁西辺の曲折部分(北より)… 46
第4図 三の丸跡より本丸土塁を望む	6	図版 3 (1) 本丸内の井戸跡と称するところ（西より）… 47 (2) 二の丸跡東縁辺の石壘（北より）… 47 後方本丸土塁…………… 47
第5図 本丸内の井戸跡と称するところ	7	(3) 二の丸跡東縁辺の石壘（北より）… 47 (1) 三の丸跡東縁辺の石壘（南より）… 48
第6図 聰賀城跡測量図	9	図版 4 (2) 山頂部北側一段下った平坦部（南より）… 48 (3) (2)の西側縁辺の列石状況…………… 48
第7図 本丸跡周辺測量図	11	(1) 本丸跡試掘前の清掃風景（北より）… 49 (2) 試掘区の設定（北より）…………… 49 (3) 4区試掘状況（北より）…………… 49
第8図 東部尾根測量図	13	(1) E～F区試掘状況（東より）… 50 (2) E区小穴周辺の状況（東より）… 50 (3) E区小穴内部の状況…………… 50
第9図 北側山腹測量図	15	(1) C～D区土層確認の掘り下げ状況（東より）… 51 (2) (1)の掘り下げ壁面の状況…………… 51
第10図 本丸跡試掘前の状況	19	(3) C区備前焼窓口類部出土状況…………… 51
第11図 試掘風景	19	(4) 6区備前焼窓口類部出土状況…………… 51
第12図 本丸跡試掘調査区	23	(1) E区遺物出土状況（北より）… 52 (2) E区朝鮮通宝出土状況…………… 52
第13図 試掘区平面図		(3) F区铁釘出土状況…………… 52 (4) 試掘後の埋め戻し状況（南より）… 52
上 C区遺物分布	25	試掘調査の主たる遺物…………… 53
中 E区小穴及び遺物分布	25	
下 F区平面	25	
第14図 試掘区平面図		
上 2区平面	27	
中 4区平面	27	
下 6区平面	27	
第15図 試掘区土層実測図		
上 2区土層序	28	
中 6区土層序	28	
下 D～C区土層序	28	
第16図 試掘調査の主たる遺物実測図		
及び拓影	29	
第17図 佐料城跡近傍	31	
第18図 佐料城跡周辺地図	32	
第19図 藤尾城跡及び作山城跡概略図	36	
第20図 藤尾城跡周辺の明治初年現地図	37	
第21図 芝山城跡概略図	39	
		図版 9 試掘調査の主たる遺物…………… 53

I 調査の経過

中世讃岐の代表的豪族、香西氏累代の牙城であった勝賀城跡については、これまで各方面の調査研究があり、西讃の天霧城跡とともに中世山城の好例として評価されてきた。しかし、城跡全体の構造形式（縄張）を正確に把握して性格を明らかにしていこうとする調査研究は、その立地や現状からくる調査の困難さもあって、決して十分ではなかった。

このため、高松市教育委員会では、数年前から、本城跡の遺存状況を確認し将来的な保存策をとるべく、香川県青年ユネスコ連合会員や市立高松一高地部員をはじめ、地元有志の協力を得て、城跡内の清掃活動、城跡主要部の遺構平面図（本丸跡、二百分の一縮尺図）の作成などに取り組んできた。これによって、ほぼ城跡の全容を観察することができるようになり、漸く本年度において、国庫及び県費補助による本格的な城跡確認調査を実施するはこびとなつた。

今回の調査は、城跡の全体を図化する地形測量と本丸跡の状況を把握する試掘調査を行なうものであったが、加えて、派出する尾根上や山麓に所在する関係城跡など周辺部の踏査も行なつた。業者委託の地形測量は昭和54年1月中旬に始まり、遺構を含めた測量の視点については調査員が現地で指示、補助した。これに次いで、2月18日から試掘調査に入り、予定通り23日、24日には試掘区の埋め戻しと並行して周辺部の踏査に当たった。地形測量を別にすれば短時日の調査であったが、城跡に関する新知見を得ることもでき、それなりの成果をみたといつてよい。さらに、昭和54年度においても、今回調査の成果に基づき発掘を含む城跡の細

部調査が計画されているので、今後より一層本城跡の性格が明らかにされていくことが期待できる。

なお、今回の調査においても地元有志から多大の理解と協力を受けているし、調査を契機として本城跡に対する一般の関心も大いに高まりつつある。試掘調査中の2月18



第1図 城跡探訪会風景

日勝賀城跡探訪会を開催したところ、100名を越える参加者があった(第1図)。調査後の地元鬼無町佐料公会堂(2月28日)及び現地(3月11日)での調査報告会でも城跡に関する活発な質疑・討議が展開した。なかでも、勝賀史談会の調査研究はこれまで相当な成果をあげており、今回の調査に益するところが多く、積極的な協力を受けた。勝賀史談会、地元有志の方々に対し、記して厚く謝意を表します。

Ⅱ 城跡の位置(第2図)





第3図 勝賀山遠景(南東鶴市町より)

頂から周囲山麓部への見通しも良いうえ、標高200m前後の山腹あたりからはどこを見ても急坂・急崖状の地形で、まさに峻陥な自然の要害地形の様相を呈している。

山頂部からは眼下に東・南方にひらけた平野部を収め、北方に広

がる備讃瀬戸海域への

展望も絶好である。それは、単に景観の絶佳さを言うのではなく、容易に陸海のどの方面にも通じて事を成し得る地理的好条件を物語るものである。すなわち、勝賀山の立地が、この地域において戦略的、戦術的要件を兼ね備えているところに大きな意味がある。帰するところ、その昔此處に香西氏が人智と労力を傾けて築城したのは、至極当然のことではなかろうか。

城跡は山頂部一帯に所在するが、地形的な状況から大まかに3区分される。本丸跡を中心とする主要部が南に位置し、北東部にかけて緩い階段状の削平部(郭)が直線的に並び、主要部北側の急坂斜面を下ったところに不整形な平坦状部がある。従来、南の主要部を本丸跡、北東部を二の丸跡、北側の平坦状部を三の丸跡と呼称してきたが、すでに「本丸跡を中心とする主要部」と述べたように、二の丸、三の丸に該当させるところは主要部内に包括されているようだ。城跡を全体的にみて、城構えの造作は本丸跡周辺部に集約されているわけであるが、とりわけ本城跡では土塁、石塁などにおいて顕著に認められ、それらの遺存状況も良好である。

ところで、城主香西氏の城塞居館については、その発展の過程において勝賀城をはじめ周辺の要所十数ヶ所に一門の城館を構えて堅固な態勢をつくり、領有下の地域にも部将の城館が40余りも存在したと伝えられる。現在、その跡をすべて辿るというわけにはいかないが、本拠地香西付近の諸城跡に関しては文献の記載をもとに所在が次第に明らかになっている。なかでも、勝賀山東麓の佐料城跡(里城、居館跡)、作山城跡(繁の城)、藤屋城跡(香西氏最後の拠点)や香西の海浜に接する芝山城跡(海防強化の出城)などはよく知られる

ころであるが、今回あらためて踏査し概況を把握した。

Ⅲ 城主香西氏の略年譜

讃岐の中世史において18代四世紀にもわたる栄光の歴史を継った香西氏の系譜は、讃岐藤原氏（保安1・1120年讃岐の国司として赴任した中御門中納言藤原家成と綾大領貞宣の女との間に生まれた綾大夫章隆を始祖とする）の後裔たる左近将監資村に始まる。承久の乱（承久3・1221年）で鎌倉幕府北条氏に従い戦功をあげた資村は、阿野・香川四郡の守護職に補せられ（守護職であるも実体は不明）、讃岐藤氏63家の棟梁として勝賀山に要城を築き、山麓佐料に居館を営む。以来、香西氏は陸海を制圧し、中世讃岐を代表する豪族に発展していくのであるが、その歴代中より注目される事象を取り上げてみたい。

8代資茂は、時に備讃海域を脅かす海賊衆を寛元4（1246）年追討した功により、幕府執権北条時頼から備讃諸島警備の任を受けた。この際、香西の海浜に接する柴山に海防強化の出城を構えるとともに、塩飽島・直島・小豆島など50余ヶ所に一族・家臣を配し、次第に制海権を掌握強化していく。現在に至る、小豆島の島田、直島の高原、塩飽の宮本・吉田・妹尾等の諸姓は、各陣屋に派遣された者の庶裔であると伝えられる。

その後、7代親茂の頃には、讃岐北朝勢力に属し、一族の安泰を図り、管領細川氏との関係も深める。10代家資が正平7（1352）年南朝勢との京都鳥羽の戦いで死去した直後、跡目相続をめぐる思わぬ内紛が生じたが、13代元資の時代を迎え、管領細川勝元の信任厚く、香川（天霧城主）・奈良（聖通寺城主）安富（雨瀧城主）氏と共に細川四天王と称されて大いに勢威を張る。元資の長男元直は常に京都にあって活躍、歴代中でも勇名高く、応仁の乱（応仁1・1467年～）では東軍の将細川勝元を助けて中堅的役割を担い、世に「上香西」家とされる系譜を成した。このため、讃岐香西家は二男元綱が継ぎ、これ以降を「下香西」と呼んでいる。なお、上香西家は、元直が勝元没後細川澄之を押し立て阿波三好氏と対立、永正4（1507）年京都嵐山城で陣没した後、その子元継が二代を継ぐが、晩年讃岐に帰国、香川郡上村に唐渡家をたて下香西家をもりたてる。

15代元定は、細川氏の衰退に伴い少なからず影響を受けた香西家にあって、当時強盛を誇る周防の雄大内義興の旗下に入り、永正16（1519）年九州大友家達

征軍に参陣、享禄4(1581)年朝鮮國に兵船三艘を派遣したりしている。これらを通じて、朝鮮・東シナ海に雄飛、活発な交易を展開し財力を積み、香西家全盛期を現出するわけであるが、そこには、塩飽・直島などの備讃諸島を足場とする、いわゆる香西水軍の力があった。この豊かな財力を背景に16代元成は、阿波三好長慶・実休の讃岐進攻に際して硬軟両様の高度な政治力を発揮するのである。

そして、若き盲目の城主18代佳清に至りて、名門香西氏の系譜は悲劇的に幕を閉じる。幼少にして家督を相続、陣中での失明、後事を弟たちに託そうとする一族の内紛（天正6・1578年の成就院事件）、同族羽床氏との抗争（天正7・1579年）など波乱にみちた道程は、さらに土佐長宗我部元親軍の侵攻によって曲折する。

天正10(1582)年8月、一気に国分寺まで駆を進めて気勢のあがる土佐軍を前に、薄氷を踏む思いの香西軍は藤尾城（天正5・1577年、周辺の防備を考慮して佐料城より移る）周辺において最後の決戦をかまえる。いよいよ落城寸前と見られた際、天霧城主香川信景を仲介とする和議が成了。これは、かって、香西氏の斡旋により香川氏が三好実休と和睦したことのいきさつを背景とするものか。

しかし、和議によって救われた香西氏の悲劇的な行先はもう目前にあった。三年後、天正13(1585)年5月、豊臣秀吉の四国攻略に伴い佳清はついに野に下り、香西氏18代の歴史は終りを遂げるのである。ここに、初代資村以来約360年の牙城勝賀城をはじめ、佐料館ほか周辺の要害地は荒廃の途を辿ることになる。

IV 城跡の概要

今回の調査では、業者委託の地形測量において調査員が現地で立合い遺構の所在を指示、図化するかたちをとったので、単なる山頂部一帯の地形測量に留らず、城跡全体を正確に位置づけた遺構図も合わせて作成できた。これによって、遺構の概況や繩張について述べるが、なお現状では城跡細部の状況を把握しきれないところが多々あるので、この点については今後の調査に待ちたい。

1 遺構の概況（第4～9図）

城跡を全体的にみれば、先述のとおり、前平地としての郭の配置は山頂部南の本丸跡周辺部にまとまりをもった在り方を示す（第6図）。その配置には、地形的に段差をつけたり、土壘・石壠を設けての郭の区分と、他方では相互の連絡関係に配慮したところが十分に窺える。さらに周囲縁辺のほぼすべてには土壘を巡らし、要所に石壠（石垣）を設けたこの区域が本城跡における主要部を構成するところであることは容易に理解できる。従来、この区域全体を指して本丸跡と呼称してきたが、本丸はいうまでもなく主要部、つまり内郭部の中心的存在であり、ここでは土壘が略方形（北側で広がり、西・北辺の長い歪んだ方形状）に囲繞して堅固な構えを見せる平坦部こそ本丸跡にふさわしい（第6図1）。ここは南北60m、東西30～40mを測り、1700～1800m²の城跡中最も広い場をもつ。今、龍神祠（図版1-1）のあるあたりより北西部に向かって徐々に地形が高まり、近辺には自然露岩が散在して造成前の山頂部の地形を彷彿させるが、見た目にはほとんど平坦地をなしている。北東側に幅3～4m、土壘の途切れた開口部（本丸虎口・木戸）がある（図版1-2・3）。その北側、鉤形に折れる土壘の内側には井戸跡と称するものが残る（第5図、図版3-1）。上端約4m四方、深さ2mほどになる落ち込みであるが、単に掘り込んだという程度のもので壁面、底部には何等の施設もない。ずっと以前に誰かが故意に掘り下げたという噂もあり、これを直ちに水の手と

決め難い。しかし、山城にとって水の手は最も重要、その確保にあたって、井戸や貯水施設を土壘、石壠で固め、また櫓をもって防備する水手郭（曲輪）が造られる。鉤形に折れる土壘の在り方は、本丸木戸の構えのためだけでなく、如何に



第4図 三の丸跡より本丸土壘を望む

も落ち込み部を防備するかたちをとり、この一画を水手郭的様相に仕立てている。落ち込み部を井戸跡と判断するかどうか、なお検討が必要である。

本丸跡を廻繞する土塁（第4図、図版2-1）は、残存する土塁中最も堅固な構えを見せるが、部所によって築成時の形状差があったものだろう。

本丸木戸両側においては、下段の郭からゆうに見上げる高さを有し、次いで本丸北側の郭との間を仕切る土塁も頑丈である。本来、地形的に高い西辺の土塁は幅、高さとともに他所より減じる。概して、断面は梯形、上辺（幅）^{ひらみ}1～3m、底辺（敷）^{しき}6～7m、高さが内部から1～2m、外側において3～4mを測る。一般に土塁斜面（法）^{のり}を外側に短く、きつくするものであるが、本土塁では内外の高低差によって防備の意味を強めている。

土塁の築成にあたっては、要所で石塁を基部に据えた「腰巻石垣」状を取り入れており（図版2-2），盛土作業でも掘削土（外周部を掘き上げ）を版築工法によって固めたことであろう。

さて、本丸跡の北側、土塁の喉達虎口で連絡する一画には、細かく見れば、0.5～1mちかい段差によって区分される4郭（第6図2）が造られ、東側2郭は15～20m大の方形に整形されたもので縁辺には、土地掘削時の採石をそのまま利用したと思われる石塁が3～4段に築かれている（図版3-2・3）。その石塁直下に、本丸木戸に通じ、山頂部北東向きに並ぶ郭に連絡する幅1～1.5mの通路がある。通路下方東側は2mほどの切岸状に掘り下げられた2郭（第6図3）が存在し、先きの4郭とは、地形的にも別途の区画を考えさせる。南側の郭の周囲には腰巻石垣状の低段の土塁がめぐり（図版4-1）ちょうど本丸木戸前面を防備する態勢を読み取ることができる。土塁で区分された北側は約20×27mのかなりな広さを有する平坦地であるが、北西隅部に巨大な露岩が放置されている。どうも、あちこちに見受けられる露岩の在り様からして、地形の掘削造成もある程度において行なわれ、特に



第5図 本丸内の井戸跡と称するところ

建造物等の配置のため、何が何でも平坦地に造り上げるというものではなかったのか。

本丸跡土壘の南寄りの外縁には、二重目土壘との間に4～6m幅の細長い塔状の平坦状部が存在する。ある程度の幅をもち、本丸跡から一段下がった位置にあり、南北の郭を連絡する意味をもつところから察して帶郭と考えたが、地形図で見るかぎり本丸跡を外周するものではなく東側のそれは腰郭的だといし、西側のは、前後の土壘の構築に当たって掘き上げられた残存部であり、郭としてより通路様に利用されたとみた方がよいかもしだれない。

本丸跡南東隅に接して低段の土壘が楔形状に囲む小平坦地（約12×8m）がある。その位置関係や南側に幅2.5mの開口部をもつ、東辺土壘が二重目土壘に接する、ことなど今一つ明瞭な解釈ができるないが、南方尾根筋を登はんして本丸に迫る敵に対しての特別な構え、つまり備防の意味（横矢に係る壘形式）を想定した配置なのか。そういうえば傍らに不整形だが二～三段に区分される削平地が造られ、土壘外の南西に下ったところの、曲折する急坂小道を登りつけ、いよいよ山頂部に至るという取付きにも猫の額ほどの加工部が認められる。

山頂部北東向きに緩く下る尾根上の郭の並びは（第8図）、主要部の前衛的な性格をもつものであろう。主要部との境をなすあたりの東西側には、外幅で10mにも及ぶ堀切り状の地形が造られている。中央部の小平坦地は通路なり足溜りの用をなしたものであろう。何にしても、堀切り状地形はこれより北東部が、主要部とは区分される意味をもつものであることを示すにはかならない。北東部手前の3郭（第6図4）は緩い斜面地形に存在するもので、加工が十分でなく、各々の段差が少ない。さらに北東に向かって、先端部の大・小7郭に届く。最初の郭（第6図5）は、おそらく自然の平坦状地形を利用したもので、北・東側に土壘の痕跡（幅0.8～1m、高さ30～50cmほど）が認められる。興味深いのは、北端部の構え（第6図6）である。細長く孤状を呈する郭の前面に幅1m前後、高さ50～60cmの土壘跡が残存し、地形的に前方の急崖を考慮してもなお土壘をもって防備する用意周到さが感じられる。

北東端部から西方に下る細道があり、標高320～321mの平坦部（第6図7・第9図・図版4-2）に至る。一帯は松木、雜木がおい茂り、これまで城跡としては不明瞭であった箇所で、俗に三の丸と呼んでいた。ここは、周辺の地形状況から推して、本来緩い斜面地形が山腹に張り出したところであり築城に係る造成は西側部分の一画（45×20m前後）程度ではないかと見ら



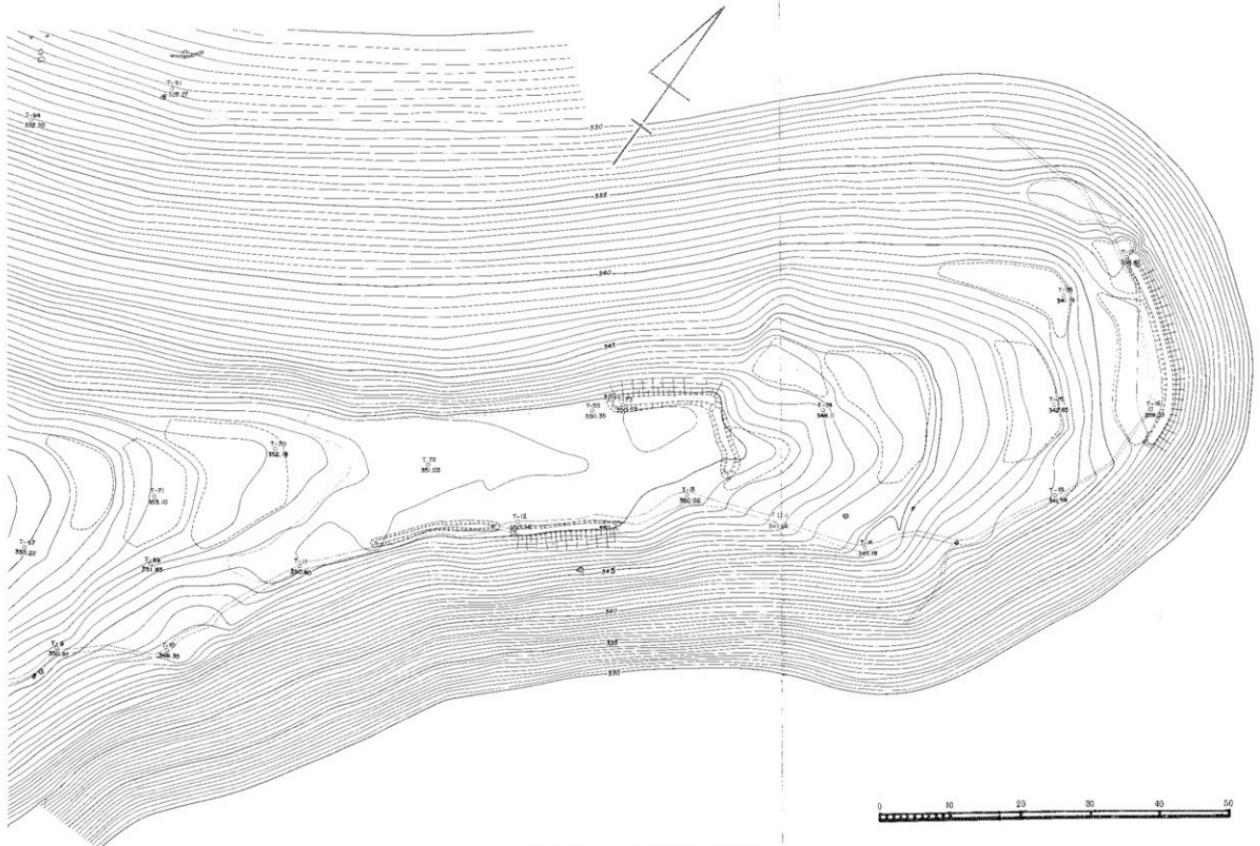
第6図 勝賀城跡測量図



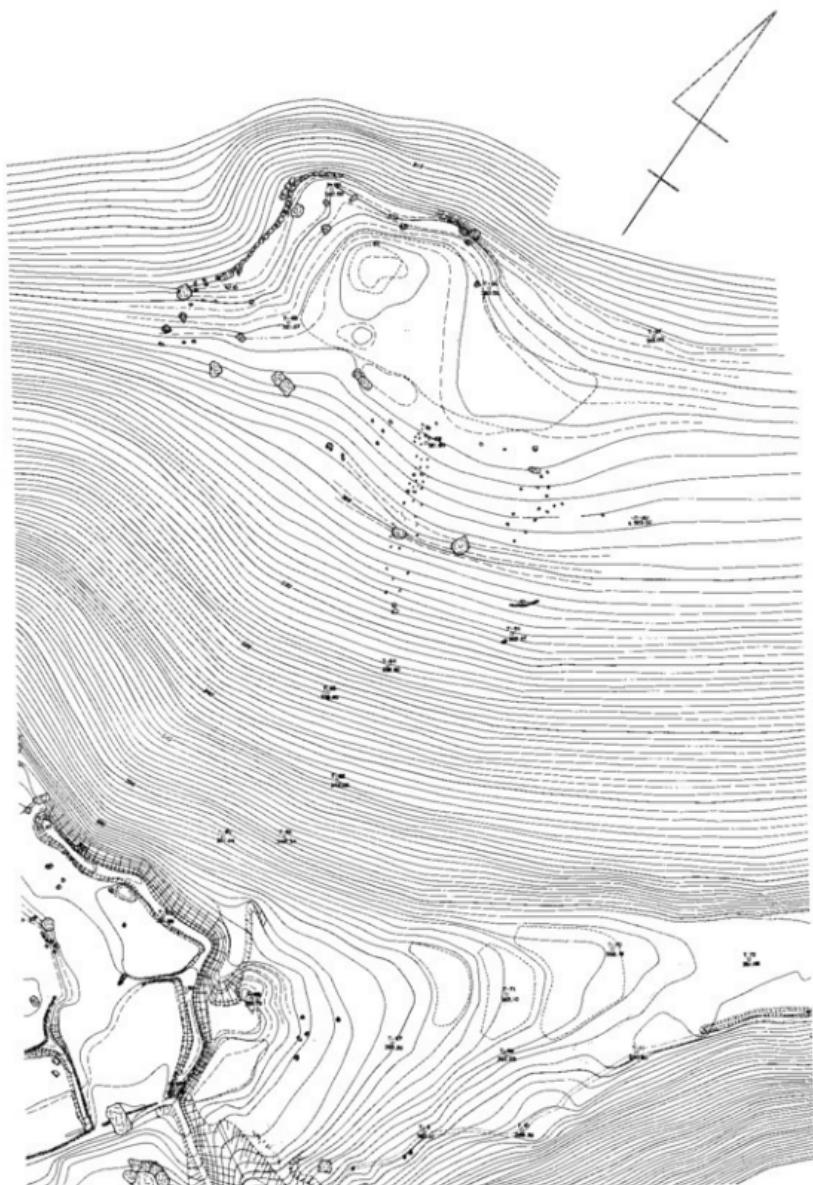
第7図 本丸跡周辺部測量図

0 10 20 30 40 50

- 11 ~ 12 -



第8図 北東部尾根測量図



第9図 北側山腹測量図

0 10 20 30 40 50

-15-

れる。特に周辺より幾分高まる20m四方は十分削平地と観察でき、その2mほど下った西縁斜面部には、縁辺を築くといった形状で巨岩が列石（図版4-8）をなしている。この場所は、眼下に香西の海岸線を扼し、北方に広がる内海への展望も好都合だが、他方への視野は全く遮蔽され、いわば北方への備えにのみ用をなしたところか。踏査の折、北東麓香西北町から見上げると何なく視野の内に入り、一層香西氏の制海権に係る城構えである、との感を強めた。

踏査といえば、勝賀山全山については十分といえないが、要注意と目される尾根上において行なった。列石を伴う郭から北西に下降する標高270～280mの緩い尾根上で、近接する2ヶ所の平坦部を認めた。28～24m×14～16mほどの広さを測るものだが、いわゆる加工部の状況には見受けられない。しかし、これより北麓中山町に下るも容易だし、前面が深い谷地形、列石を伴う郭との関連性も考えられるところから注意を引いた。他には、中腹から山麓部にかけて、これといって取り上げるべきところを認めなかった。このため、現時点では、本城跡の特に遺構が残存するところを山頂部一帯に限って考えている。

2 繩張について

築城に際して基本的に重要なことは、まず戦略、戦術上において如何なる地取り（城地の選定）をするか、であり、次いで、どこを中心にしてどこに何を造るかという全体的な構築計画の繩張を勘案することである。郭・堀・塙などの土木工事（普請）や建造物の建築工事にはそれなりの労苦もあるが、それらは繩張に従って工事を進めればよいわけであるから、繩張こそが、その城郭の性格や評価を決定づける。

本城の地取りについては既に述べたところであるから、ここでは郭の繩張、堀の繩張について考え、全体的な構造形式を把握したい。これは、あくまで試論的立場で考察するものであるから、今後本城跡の性格をより明らかにしていくうえで手掛りの一つになれば幸いである。

本城跡は、郭の在り方及び地形的な状況からおおまかに3区分される。山頂部南の主要部とするとところは本丸を中心とする内郭にあたり、北東部尾根上の郭の配置は内郭の前衛的な性格をもつ外郭部をなし、北側山腹の郭は他から独立したような觀を呈する。内郭、外郭部の区分については、その立地関係からだけでなく、先に指摘した堀切り状の地形が示唆するところである。

内郭部は、本丸跡と北側の4郭、一段切岸状に下がった東側の2郭から構成される。喰邊虎口で本丸跡に連絡する北側4郭は櫛張上二の丸的状況にあり、後の2郭は本丸跡、4郭の前面を防備する態勢にあって三の丸としての取り扱いが可能である。

このように、本城跡の主要部（内郭）には、本丸を中心に二の丸、三の丸が相互に隣接し、寄りかかった形状で配置されたと見受けられ、その所在は梯郭式乃至は環郭式の櫛張形式に属するものといえる。そして、本丸を最高所に以下段下がりに計画するところの、いわゆる「一・二・三の段」の理想的な形態にちかい状況にある。

本丸木戸（虎口・出入口）とするところは、中世的に言うなら本丸に違いどころから順に「一の木戸（三の丸）」「二の木戸（二の丸）」と呼ぶので三の木戸に該当し、当時としては木柵或いは冠木門様のもので出入りを固める程度であったろう。

外郭部をなす北東部尾根上の郭の並びは、直線的で階段状を呈する。一般に尾根上を階段状に掘削して郭を構築する目的は、何等かの施設或いは敵の登はんに備えた足溜りの平地を確保すること、郭の高低差によって防備の能率を高めること、の二つにある。後者については、要するに地山掘削土を周縁部に付加して下方に防御用の急斜面を造り出すことであり、さらに削平地縁辺に土塁を築成した場合には、その段差が一層大きくなり急傾斜となる。土塁は防御の楯となり、上段の郭の味方は下方の敵に対し圧倒的な有利さを保持できるのである。

北東部尾根の頂部は、本来長さ180m（幅15～30m）ほどの間で高低差17～20mを測る緩い斜面地形であったためか、連続する郭の高低差はたいしたものではない。また、内郭部と接するところに堀切り状地形を設けたほかには連続する郭を遮断する施設（切通し、空堀など）も見当らない。この点では、郭の配置が単調であると言わざるをえないが、北端部とそれに次ぐ三段目の郭の前面及び東縁に築成された土塁は単調な構成に変化をつけるものである。

北側山腹の郭は、内郭・外郭部のまとまりを示す山頂部の櫛張とは恰も別個に独立したような状況にある。全山要害化を図る中世山城においては到る所の自然地形を利用するものであり、これを別個の櫛張によるものだと一概に言い切れるものではないが、それにしても山頂部の郭配置とは趣を異にする。築成の時期差を考えてもみた。

さて、以上のような郭の繩張を全体的にとらえると、内郭と外郭、本丸を中心とする内郭の構成、本丸木戸の位置、本丸南側の構え、などの諸点から、どうやら本丸東側を大手、南側が背後を守備する銃手の位置にあたるものと考えられる。ただ、中・近世城郭においては、通常南方に大手方面を設計し、北東方は鬼門とされるところから銃手口が開かれる場合が多い。しかし、山城は自然地形の制約によって必ずしもそうした繩張が可能でない。本城跡についても、それが言えるようだ。

ここで、内郭の主要要素をなす墻の繩張についてもう少し考えてみたい。先述のとおり、墻には土塁と石垣があり、内郭を二～三段に巡る土塁の遺存が顕著である。それは「^{たた}敵き土塁」に「腰巻石垣」を取り入れたもので、内郭部を如何にも専守防衛する形態を示し、部分的に単純な在り方を呈していても、全体としてみると、かなり複雑な構成の一部分をなしている。特に北西部の二～三段目土塁は、高低差もさることながら、迷路状に見せる役割を果たし、郭を区分する土塁も単に区分・防衛の意味だけでなく全体の中で位置づけられている。その他、拠形的に巡るもの、左右の土塁がその末端部で前後に重複する喰違（違虎口、通路はヘアビン状となる）、直線的な形状に変化をついた折れひずみ（図版2-3）や入角部、連接する土塁に高低差をつけて弾力性をもたらせたところ、など種々の要素が併用され、郭の配置に巧みに相応させた繩張は防備の最善を尽したものというべきであろう。軍学書等において言うところの「陰の繩張（入り難く守り易い）」とされるものか。

なお、土塁の外表観察では、墻上に何等かの施設（櫓、逆茂木・乱杭などの柵、特別な植樹）があったかどうかは不明である。

V 本丸跡試掘調査

1 試掘区の設定（第12図）

本丸跡内の遺構の有無や城跡の年代的な位置づけに直接係る遺物の検出を通じて、城跡の性格をより明らかにしようと試掘調査を実施した。しかし、今回の調査は予備的に行なうものであって、試掘による損壊を最小限度に止めた範囲を設定した。すなわち、現状で十分外表観察でき得る土塁部をさけ、本丸跡は中央部に南北の並びをもたらしたT字形8区画をとった（第10図・図版5-2）。この区画は、将来の調査を考慮した第12図の区画設定中では

第2・4・6及びそれに直交するHヘド区（これは便宜上の区称）にあたり、都合 $128 m^2$ となる。

本丸跡は見た目にはほとんど平坦地をなすが、北西部に向かって徐々に高まる地形で、本丸木戸跡からみれば $1 \sim 1.5 m$ ほどの高差がある。北西部には自然露岩も多く、おそらく一帯を掘削して東側に引き寄せ整地したのであろう。このことは、中央東西のC～D区において観察されるところでもある。

2 試掘区の状況

試掘は一応表土下 $10 \sim 20 cm$ までの第2層精査の段階に止めたが、各区とも自然の節理をもった石や風化礫が多く（第13・14図、図版5-3），E～F区で浅い落ち崖み、二段の掘り方による径約 $24 cm$ 、深さ約 $37 cm$ の小穴を検出（図版6）したほかは、遺構らしいものを見なかつた。小穴について、掘立て柱穴様と考えるが試掘区内では他に検出されず、速断をさせたい。むしろ、区画内及び周辺部で平坦な上面をもつた石や上面部を切削加工して平坦面を作ったと見受けられる礎石様のものがいくつか存在することに注意を引いた。中には、明らかに据え置かれた状況にあるものもあり、今後の精査によって、建造物地形の規模が明らかとなる可能性がある。

試掘区の土層（第15図）は、概ね $10 \sim 15 cm$ 厚の暗褐色から暗茶褐色脛植土層下に、黄褐色風化小礫を多量に含む暗黃土色土層が存在する。B・D区の、北西部の高まる地形にある区画では挙大の礫が一面をなし、風化土がその間に入り込むといった様相である。なお、土層観察のため第2層を $40 cm$ ほど掘



第10図 本丸跡試掘前の状況



第11図 試掘風景

り下がた C～D 区においては、西側 D 区に自然母岩とつながる石や挙大の礫が多く、東側 C 区に向かって礫も細小化、土量が増える（図版 7-1・2）。これは先述のとおり、北西側を掘削して整地したことを物語るものだ。

調査で得た遺物には表採によるものも多いが、試掘によるものは第 2 層上面乃至は上部において出土した。主たる遺物の出土分布は第 13・14 図の試掘区平面図に示すとおりであり、特に集中的であったのは C 区東寄りの部分である。

3 遺物について

本丸跡での表採や試掘区出土遺物として、備前焼、土師質土器、青磁、鉄釘、銅製留釘、古鏡などを得ている。備前焼、土師質土器は確かに器形を復元するに至らない破片ばかりであるが、備前焼では壺・甕・擂鉢片・土師質土器では小皿・碗・擂鉢・土鍋片などと観察される。これら主たる遺物を第 16 図（図版 9）で取り上げ、以下各個について概要を述べる。

備前焼壺（1・2・5・6・7、図版 7-3・4）1・2 とも肩部が黄褐色の、いわゆる胡麻状を呈し、頸部内外面はくすんだ茶褐色を帯びる。1 の口頸部はほぼ直立し、口縁端部は外へ小さく折り返され玉縁状を作る。肩部には櫛状工具による 4 本（上部二本は途切れる）の沈線が画がかれ、それに接してカーブする三本の沈線が認められる。直線波状文といわれる文様形態である。2 は 1 と同形状をなす壺の口頸部であろう。5 は直線波状文の、6・7 は直線文の一部を止める破片である。

備前焼擂鉢（8・4）8 は内面に櫛状工具による沈線が明瞭に残る擂鉢片であるが、4 については口縁部の形状から推して、この類に取り入れた。8 の沈線は底部に向かって放射状に画がかれているよう、残存部で 12 条を数える。口縁外面は上下にかなり拡張するものとみられ、下端部は脹みをもつ。内外面とも赤茶褐色。4 の口縁外面も幅 3.4 cm ほどの広がりがあり、下部に 2 条の凹線が入る。下端部は断面三角状で垂れ下がり気味である。内面は赤茶褐色、外面は茶褐色を基調とするが、肌荒れ様の白味を帯びる。

土師質擂鉢（8・9）8 は底部にかかるところの細片、内面に 5 条の櫛目状沈線が入る。胎土、焼成とも良好で硬質、淡茶褐色を呈する。9 は薄い器壁の内面に櫛目状沈線をもつ細片、一方側に 4 条のまとまりがある。内面淡赤褐色、外面淡黄褐色。

土師質小皿（10）底部からの立ち上がり部分が薄く、皿の器形をなすもの

とした。底部径 5.5cm、底部切り離しには回転を伴わず、左右から糸を引いたと思われる痕跡が一面に残る。胎土はきめ細かく、焼成良好で硬質、淡黄褐色を呈し、通常の小皿類に比べて丁寧な作りか。

土鍋（11） 口縁端部から少し下がって断面三角形状の鶴足がつく。内外面に横なでの刷毛目痕が残り、淡黄褐色を呈す。

鉄釘（12・13） 12（図版 8-3）は頭部及び尖端部を欠損するが、ほぼ直な原状を保ち、長さ 9cm 前後のものか。断面正方形状、頭部に折れ曲がる部分の痕跡が認められるので 13 の頭部と同形状であったものだろう。13 の頭部には打痕が残るが、その端部の下向きに折れ曲がる形状は殴打による影響を多少受けているにしても、本来のなものと見受けられる。中ほどの折れは使用時のもの。12 に比べ幅広、断面長方形状である。

銅製留釘（14） 短い尖端部を打ち込み、径 3.5～4mm の環状頭部に何等かの軸様器材を通して使用したものと考え、敢えて留釘の称を用いた。

古銭（15・16・17） 15 の治平元宝は 1064～1067 年鋳造の北宋銭、16 は肝心の部分を欠損、ただ「元」の字体からみて、「〇〇元寶」と右回りに記銘した北宋銭の可能性が強い。「景德元宝」或るいは「明道元宝」かと類推できそうである。17 は朝鮮通宝、1428～1424 年鋳造されたものである。これらは第 2 層上面において出土し、15・17 は近接していた（図版 8-1・2）。

4 調査の所見

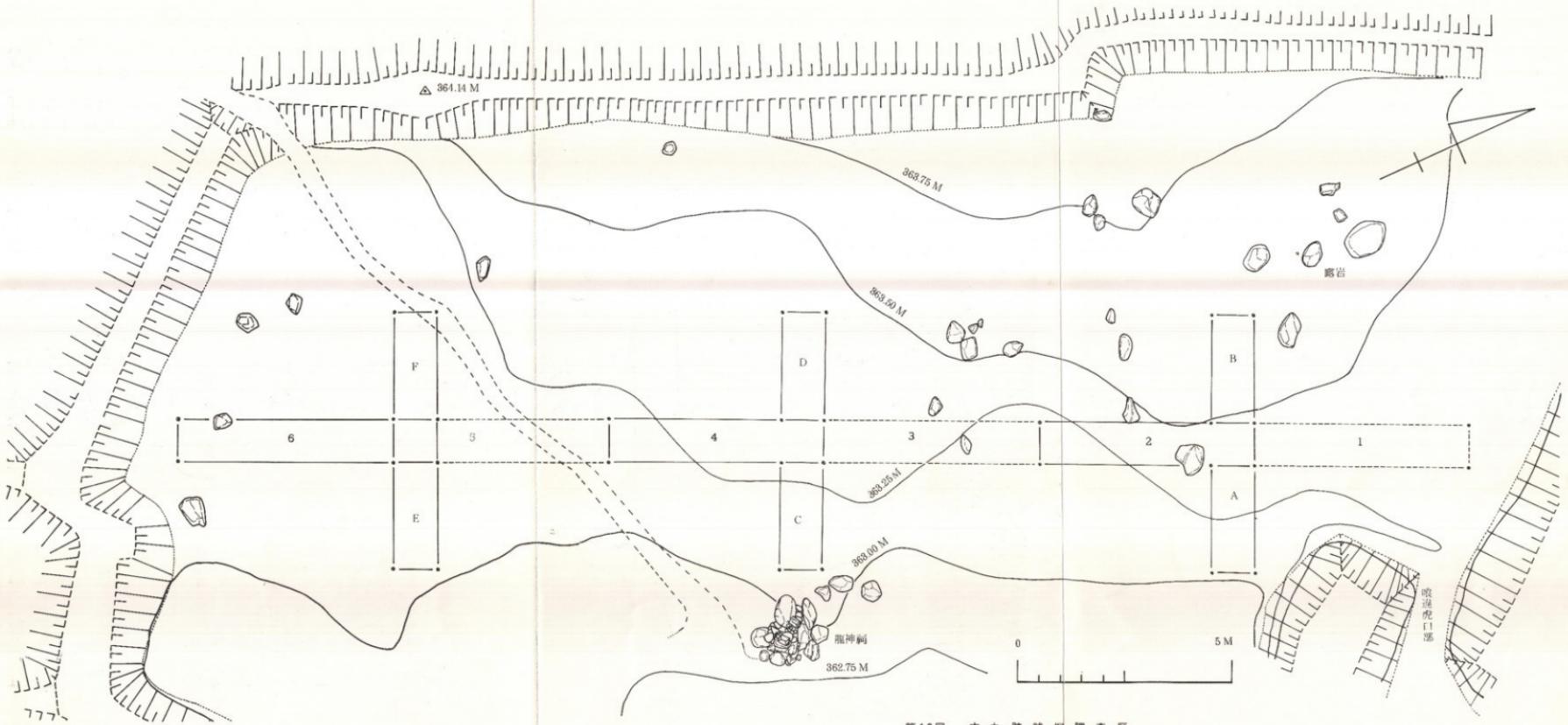
今回の試掘区では、期待した建造物遺構の所在が認められなかったが、幸い遺物については城跡の年代的な位置づけを考慮する資料を得ることができた。ここでは、すでにふれた本丸跡の概況や造成状況を省略し、遺物に関する所見をまとめ、調査の所見としたい。

備前焼壺口頸部の器形や肩から胴部にかけての輪状工具による直線文・直線波状文、また擂鉢片にみる口縁部の形状などは、おおまかに鎌倉時代後半～室町時代の、下っても中期頃までの時期に比定されるものである。極く時期差を絞った捉え方をすれば南北朝～室町初期を前後するものとしてもよさうである。

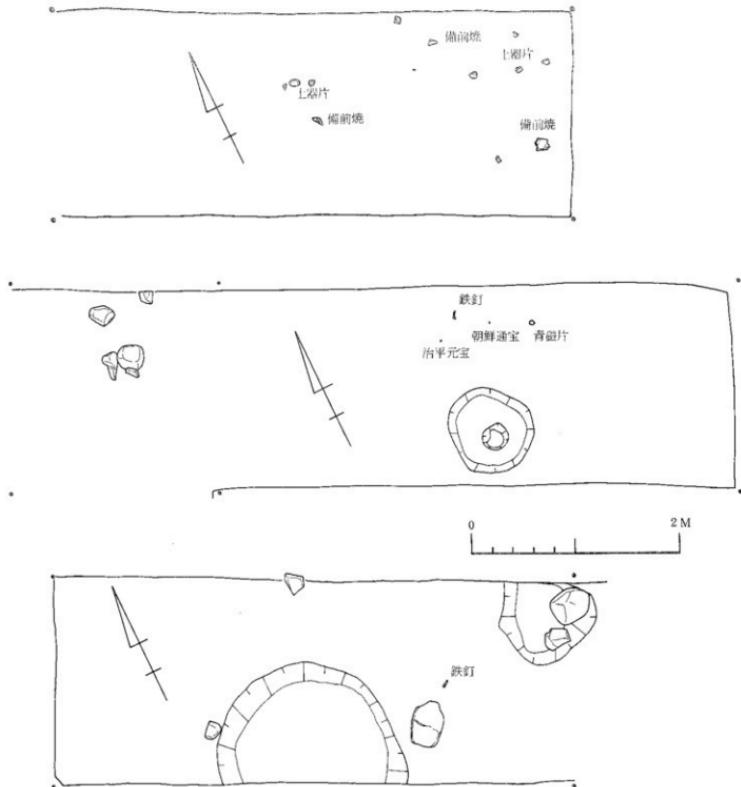
古銭については、僅かな出土点数で、しかも鋳造年に大きな開きがあり、その鋳造と輸入流通にも相当な時期幅を考慮しなければならないので、今回の調査では特定年代を求める資料とはし難いところがある。そこで、これらは、およそ室町時代半ば頃の目安を与えるものとして取り扱いたい。

以上のように、今回の調査に係る遺物が示す年代は鎌倉後半～室町中半頃であり、このかぎりにおいては、本城跡がかなり年代的に遅るものであることを物語る。

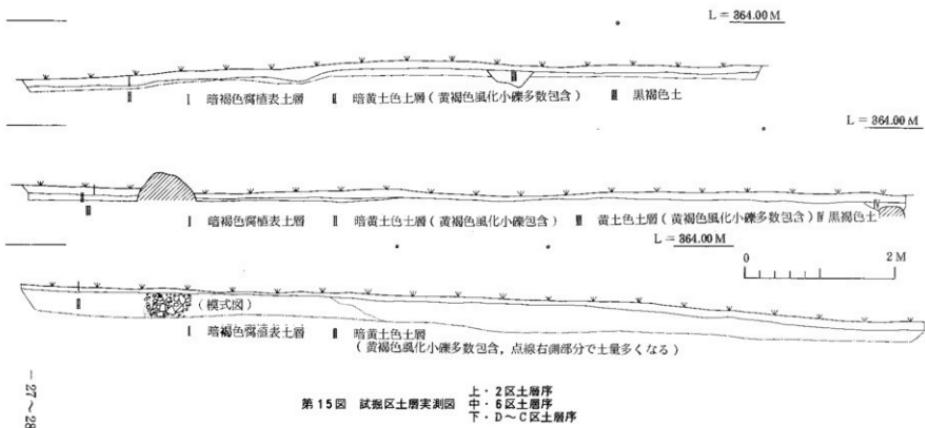
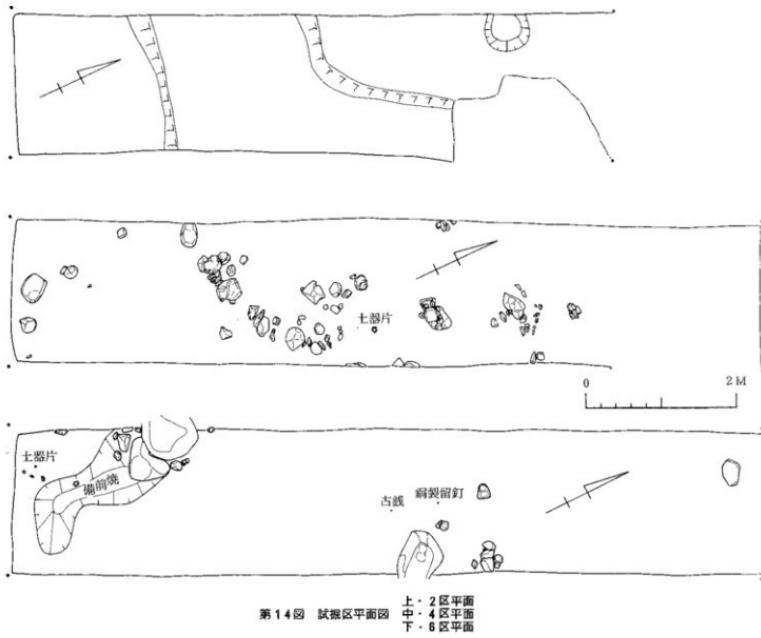
なお、表探・出土遺物中に瓦片は1点も見当らない。中世の城郭建築では瓦屋根はむしろ例外的であったとされるが、本城郭においても暗示的であろう。

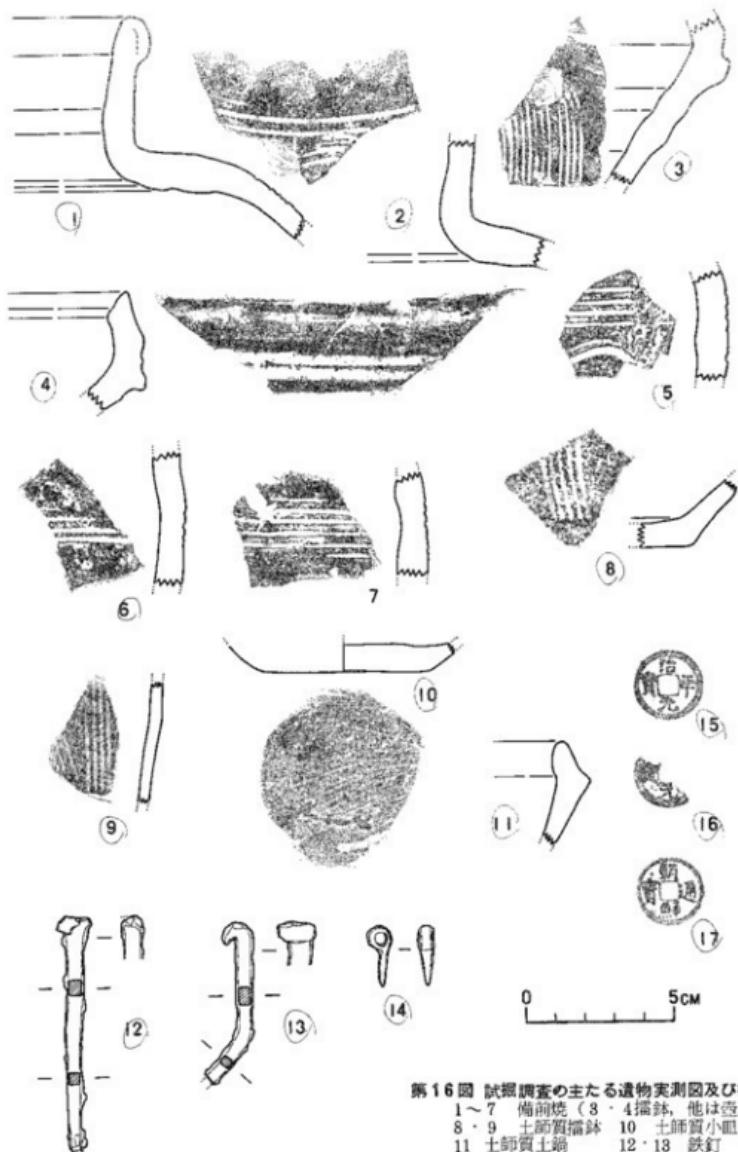


第12図 本丸跡試掘調査区



第13図 試振区平面図
上・C区遺物分布
中・E区小穴及び遺物分布
下・F区平面





第16図 試掘調査の主たる遺物実測図及び拓影
 1~7 備前焼 (8・4擂鉢, 他は壺片)
 8・9 土師質擂鉢 10 土師質小皿
 11 土師質土鍋 12・13 鉄釘
 14 銅製留钉 15~17 古錢

Ⅳ 周辺主要城跡の概要

香西寺が所蔵する「天正年間香西氏居城占地図」によれば、隅櫓を構え土塀を巡らした見事な勝賀城の城郭をはじめ、山麓周辺部の要所を押えた一門の城館が絵地図風に描写されている。東麓に堀を巡らす佐料城、岬状に突出した柴山城、天神川沿いの小山に藤尾城と作山城、本津川の河口近くに本津城（香西水軍の将本津右近）、内間城（香西氏累世の要城）、北麓住吉川をのぼって植松城（加藤兵衛）、南方に連なる袋山の鬼無城（香西兵庫）などが見られ、その描写の正確さはともかくとして、そこでは平野部よりも、むしろ香西の海浜部を固め内海を制圧せんとする香西氏の動勢を感じ取られる。なお、香西氏全盛時代には配下の部将の守る大小40余の出城があったという。一宮城（田村大宮司泰氏）、上村城（唐渡氏）、片山城（片山氏）、喜岡城（高松氏）、佐藤城（佐藤氏）、高木城（乃生氏）、直島城（高原氏）、篠原城（岡田氏）、西庄城（香西氏）、福家城（福家氏）、松縄城（宮脇氏）、渡辺城（渡辺氏）など現在の高松・坂出両市から香川・綾歌二郡に及ぶ。勿論、これら諸城跡のすべてについて、所在が確認され概要が把握されているわけではない。ここでは、特に勝賀城跡との関連から、山麓に所在する佐料城跡・作山城跡・藤尾城跡・芝山城跡を選んで踏査した概況を述べる。

1 佐料城跡の概況（第17、18図）

佐料城は、香西氏初代資村が勝賀山城に際して、山麓の居城としてほぼ同時期に築かれたとある。いわば、「詰の城」たる勝賀城に対し里城の位置と性格を有するもので、当時にあっては日常の居館であり、館城的な構造形式を備えたものであったろう。天正3（1575）年18代佳清が藤尾城を築き移り住むまで累代約350年間この城に拠った。一名、讃綾の館と呼ばれるのは、讃岐の綾氏から、つまり國の名と氏の姓を結んで讃綾となるところだからという。

城跡は鬼無町佐料に所在し、現在国道11号線より250mほど西に入ったところ、佐料公会堂の建つ北側一帯を指している。幸い、ミカン畑の一角には堀跡が残り、周辺の地形にも城跡の名残りが認められる。

城跡の所在する一帯は、標高12.5～15mの間に測り、ちょうど新池に向かって延びた丘陵尾根が徐々に低下して平地に至る尾の部分にあたる。その

ため、南北側は極く緩い谷状の地形をなし、一帯が平地からさほど比高差をもたない微高台地の地形となる。

踏査にあたって、できるだけ近傍の城跡関係地名や屋号などを採訪した（第17図、以下図1、2、3…と表記する）。それらが、あいまいになりつある本城跡の位置や規模を推定検討する有力な手掛りになると考えるからであるが、現在ある地名や屋号がそのまま当時の城郭に結びつくものであるかどうかについてはなお慎重な考証を加えなければならない。

堀跡を止める一画は「城の内」（図1、小林仁氏宅）と称され、堀跡を「内堀」という。「内堀」の名称は、すでに名東県時代（明治6～8年）の佐料地引図面（高松市役所鬼無出張所蔵）にも記名されている。「城の内」



第17図 佐料城跡近傍
1.佐料城跡「城の内」「内堀」 2.「北堀」 3.「御屋敷」「せきど」
4.「城の本家」 5.「城の台」 6.「馬場の谷」 7.「東門」
8.「城の新屋」



第18図 佐料城跡周辺地図

に接する北西隅に「北堀」の屋号（図2、北条政八氏宅）が、北東の一角に「御屋敷」の称（図8、本津米一氏所有地、あたりには「せきど」の俗称もある）が、また南西の一角にあたる公会堂横に「城の本家」の屋号（図4、泉保岩次郎氏宅）が、これに対する南東の一角には「城の新屋」の屋号（図8、小林明治氏宅）が残っている。「城の内」から北へ200mほどのミカン畑は、「城の台」（図5）の俗称がある。西へ200mほど上ると貴船神社が所在し、その北側の谷あるいは「馬場の谷」（図6）と呼んでいる。東へ200m、国道11号線に接して「東門」の屋号（図7、千房源市氏宅）がある。さらに、第17図には注記してなかったが、南へ200m、市道の交差するところは「泉保

池」の称があり、佐料城で使用された良質の飲料水がここで確保されたと伝えられる。その東、国道に当たるところが「池のはな」と称される。

こうした近傍の地名や屋号は、いわゆる「城館址のある地名」の一般的な傾向に属し、佐料城の存在を浮彫りにする効用をもつ。そこで、これらを考慮しながら、城跡とする一帯の環境を観察して、佐料城の復元に努めてみよう。

現在、城跡とする一帯は幅2m前後の道路によって東西100m、南北150m程度の方形形状に区画されている。その北側には山田池、馬場の谷あたりから下る谷川の流れがあり、南側は「東門」から山田池を経て南方より勝賀山に至る道路に面する。西側は道路を狭んで一段高まる台地状、対して東側は次第に下がる地形を示す。地形的にみても城跡のある微高台地が周辺部から画された觀を呈している。

「城の内」（第18図）の堀跡は、幅4～5m長さ約80mでL字形に折れた形状を止めるが、「城の内」周辺の細長い地目と一段低い地形の在り方、「北堀」の称、などから推して、本来は「城の内」を正方形に囲繞する形状を有していたものと思われる。とすれば、「城の内」は65m前後四方の広さが考えられる。堀幅については、北・東縁辺の地目幅が15～16m、現存幅との差が大きいので一概にいえないが、10m前後を推測してはどうか。なお、これまで「堀」の字を用いてきたが、現在養魚場として利用されており、築城の当時も水を湛えた「水堀」として構築されたものであろう（その意味では、サンズイの付いた「濠」又は「溝」の字を当てるのが適當か）。堀には北側の谷川から導水したことが容易に想像される。しかし、そうなると、北辺の堀は谷川に接して別途の堤防を備えたものであったといい難くなり、谷川そのものを堀として取り込んだものだったと考える方が妥当となるだろう。北・東辺の堀は、導水のためもあって幅広に造られていたのかもしれない。なお、この一画の南東隅に「南海治乱記」「南海通記」の著者香西成資の父植松吉兵衛時蔭の墓碑（慶安2・1649年）があり、近辺には来歴不明の社祠2基が祭られている。

ところで、「城の内」南側はやや低下した地形となるが、「城の内」に連接する一区画の状況に見受けられる。すなわち、「城の内」の前面を押さえ一区画であると考えるわけである。このあたりで、東・西側の道路が少し内側に寄るかたちをとり、「城の内」の一画よりは幾分狭い範囲となる。東側に「城の内」堀跡に接する用水路が走り西側公会堂の一角が南北に細長い地目を示しているが、現状では其処を直ちに堀跡だとは判断し難い。

以上のような城跡周辺の状況を提所として、本城跡の縄張を考えてみよう。
『城の内』の一画は、明らかに堀を伴う方形館的な形状を呈し、本城跡の主要部をなしている。さらに、その前面の南側にも1郭の存在が十分推定できる。この点、本城跡は主要部の郭と前面の郭、連接したこの2郭をもって構成される複郭式館跡ともいべきもので、2郭を堀が巡ったとしても一重の堀であり、単堀複郭式の縄張形式を考えることができる。

通常、中世前半期の方形館は約1町の規模をもつとされる。本城跡の主要部はそれより小形のものであるが、南の1郭を加算すると $12,000\sim18,000\text{ m}^2$ を測ることになり、決して見劣りするものではない。

また、单郭方形館から複郭式方形館への推移期は概ね鎌倉末～室町初頃と考えられるので、本城跡の縄張形式が示す年代もほぼその時期に該当するとしてよいだろう。勿論、これは推定縄張のうえにおいてのことであり、累代の居館となった本城跡では幾度かの改築、再改築の経過があったことを考慮しなければならない。

いずれにせよ、本城跡においては、これ以上の地形の改変がないかぎり、その占地といい、堀跡を伴う縄張といい、十分に中世館跡を推定させるものがあり、県内に数少い事例として大切に保存されるべきものである。

2 作山城跡の概況（第19図B）

作山城は、本来海上異変その他を佐料城に伝達する繫の城（伝の城）としての立地をもつ。元は烽火場があった所ともいう。しかし藤尾城まで僅かに250mほど、南西の薬師山（是竹山、標高 78.6m）を利せば、この城は香西の南口を固める最後の関門となるので藤尾城の副城としての意味は大きい。

城史に有名なのが、18代佳清の跡目をめぐる同族の確執、成就院事件（佳清の弟千虎丸を後見する作山城主香西清長・清正父子が佳清を立てる植松資正・新居資教を成就院にて謀殺）の復しゅう戦となる作山城の戦いである。天正6（1578）年1月植松氏一族に城を包囲された清長父子は、結局備前國中島へ追放されることになる。

香西南町作山、元々薬師山に連なる標高16m程度の丘陵地であったものの背後を掘り切って独立の小山を造ったところから作山の称がいわれるようになったという。そう言えば、薬師山北東麓に掘り切った高岸状の地形が残る。当時南西側を除いて、周囲はすべて深田湿地の状況にあり、藤尾城とは深田の中に道を設けて通じたと伝えられる。

現在、小山の頂部に $18 \times 19\text{m}$ ほどの削平地があり、次いで一段下がったかなり広い削平地には民家が建つ。さらに、これを取り巻くように二段下がりの細長い削平地が続く。都合4段からなる削平地は、宅地・畠地として利用されているものの、当時の郭の配置を大きく改変したものとは見受けられない。その段下がりの削平地は、小山の地形に相応させたものであり、格別複雑な構成ではない。むしろ、この城にあっては、周辺の深田溼地こそが要害の意味をもったといえよう。その上で、この城が薬師山との鞍部、佐料から香西に通じるところを固め収める閥門となり得たことを、改めて強調したい。

3 藤尾城跡の概況（第18図A）

18代佳清は、累代の居城佐料城が平地にあって防衛面が十分でないことを考慮し、天正3（1575）年藤尾山に築城を計画した。これは土佐長宗我部元親の讃岐侵略という戦雲急を告げる状況を背景とするものであり、天正5（1577）年には藤尾築城を完成せずして、佐料より移り住んでいる。そして、天正10（1582）年8月、長宗我部の藤尾攻めで名高い、伊勢の馬場の戦い、西光寺表・天神郭の戦いなど激戦5日間、いよいよ落城かと見られた時、香川信景の斡旋があって和議が成立するのである。その年11月、土佐軍が来城して築城を支援、漸く藤尾城は完成をみるのであるが、三年後には豊臣秀吉の四国攻略に伴い廃城の憂目を見ることになる。

現在、香西本町の藤尾山の城跡には、築城前に存在していた初代資村勘請の宇佐八幡宮が旧地にもどり祭祠されている。周辺の市街地にも城跡の名残りが見られる。

今、標高 20m を測る藤尾山も、作山同様に南西から延びる丘陵地形の先端部を掘り切って一山となしたもので、掘り切ったところには空堀を配する計画であったというが、これは未完成に終ったようだ。築城の当時、北側は芝山から本津にかけての海浜部が目前に迫り、すぐ東側には天神川が流れ、周辺のほとんどが深田溼地の堅苦な地形であった。

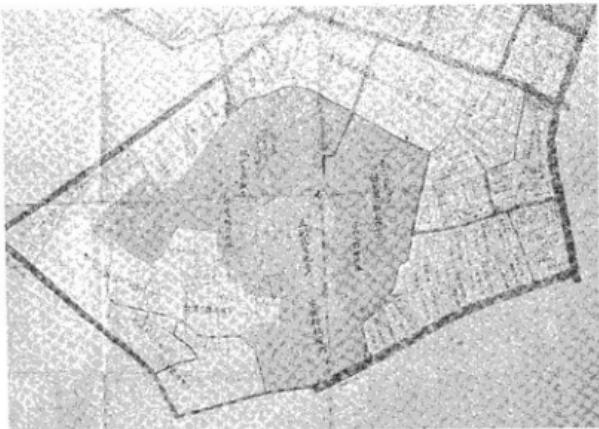
これまで、本城跡については、藤尾山に本丸を、山の南側に二の丸に当る天神郭（第19図3）を北東側に堀の内郭（第19図3の北側）を、北西側に北の丸郭（第19図A記号のあたり）を、さらに南側に五反地郭（第19図5）を配し、周囲には幅二間半ほどの水堀を巡らした繩張が想定されている。確かに、藤尾山直下の市街地の形成は、旧来の道路の在り方に制約されているのか、そうした郭の配置を十分に想像させるものがある。周辺の道路の在り方



第19図 藤尾城跡及び作山城跡概略図 A 藤尾城跡 B 作山城跡

に関しては、名東県時代（明治6～8年）の香西地引図面（高松市役所香西出張所蔵・第20図）においても、藤尾山を囲む不整な五角形状の道路

（第19図点



第20図 藤尾城跡周辺の明治初年頃地籍図

線部に相当する）が強調されている。もう1点、図面中で注目されるのは、現在すでに跡形を止めない西光寺西側を迂回する天神川（同図中では船入川の記名がある）の流れである（第19図2）。当該図では計測値を知ることは出来ないが、道路、川筋ともかなりな幅をもつものとして画がかれている。

こうした観察からすれば、藤尾山を中心とする五角形状の区域が本城跡の主要部として間違いなかろうし、天神川が外堀的な役割を果たしていたことも領ける。しかし、主要部の郭を巡り、北東方の中塚口で板橋を設けていたとされる内堀については、北東側一画の「堀の内」の称の他にその存在を推定させる手掛りが見当らない。なお、「天神」の称は主要部南東隅に接して天神社（第19図4）が祭祀されていることに由来するもので、「五反地」の称は、ちょうどその一画が五反を測るところからきた呼び名であると地元古考から聞き及んでいる。このため、後者は比較的新しい呼称と思われる。

さて、本城跡の中心をなす藤尾山の城跡についてふれよう。頂部平坦地は $48 \times 89\text{m}$ の広さを有し、宇佐八幡宮社殿が建つところである。現在の社殿の配置から見ると、改築時にかなり手を入れた様子も窺えるが、元来、本丸が位置するにふさわしい広さの削平地を造り得る地形である。山の斜面は南側にきつく、北・西側に緩い形状であるため、本丸跡を取り巻く段下がりの郭はその側に設けられたであろう。北側に郭の配置が考えられる細長い3段の削平地が見られ、西側には中腹あたりに縁辺部を崩された帯状の削平地が巡

り、一段下がって 55×42 m大の最も広い削平地がある。これが旧状を保つものだとすれば繩張上、二の丸的な取り扱いが可能となり注目される。さらに、この削平地と3mほどの段差をもつ2ヶ所の削平地が寄りかかっている。踏査では、これらの削平地の他には何等の施設も認められなかった。

このように、藤尾山はそれ自体で特に要害といえる地形でもないし、郭の配置もさほど複雑ではない（想定した郭の配置からは環郭式の繩張が考えられる）。おそらく、先述の如き周辺の地形状況や藤尾山直下の構えと相俟って、城としての堅固さを誇ったのであろう。また、そこには、主要城郭外に形成された城下集落や周辺の諸城までも取り込んだ防備態勢の強化が考慮されていたものと推察される。本城跡を中心とした城下の形成には、今もなお「香西の町はむきむき」と呼ばれるように、すべての道路は迷路化され、袋小路となるもの、蝶形に折れるものなど要塞化が図られている。こうした城構えは、まさに所堅固の「縦構」的な様相である。

4 芝山城跡の概況（第21図・以下図1.2.3…と表記する。）

芝山城は、3代資茂が内海諸島警備のため出城を構えたのに始まる。以後、香西氏の制海権に関係する番城（水城の性格を帯びる）として、家臣渡辺氏（市之丞・三之丞、高松市円座の渡辺城主）が守るところであった。

天正11（1588）年春、羽柴秀吉の臣小西行長が軍船二隻に100人ばかりの軍兵を乗せてやってきたとき、行長の「主人秀吉の使者として推参した。」との通告に対し、守将渡辺市之丞は、「いま四国は土佐の長宗我部を大将にしている。話を承る筋はない。」と大音声し、城内より大砲を打ちかけ追い払ったという話が伝えられる。如何にも、香西水軍を率いた部将の心意気が感じられる話である。

芝山は標高48.6m、東斜面が急崖状、西斜面は比較的緩い地形である。前記「天正年間古地図」によれば、東・西崖はほとんど海浜の状況と見受けられ、ようやく南麓で陸地部と接するように画がかれ、いわば、陸繫島のような観を呈している。城跡は山頂部から北に下る尾根筋に存在する。

今、南麓から石段を登りつめると芝山神社がある。その背後、一段高まるところ（図1）は露岩が多く、きちんとした削平地ではない。これを取り廻む西側の削平地（図2）は神社のあたりからその北側縁まで長さ約55m、幅9～15mを測る。ここから40mほどなだらかな尾根筋の斜面が続き、30×20mの略方形状の削平地（図3）に至る。この削平地は、上部尾根筋の自然

地形より 50~70 cm ほど掘削され
ており、取付きの東側縁辺には
幅 3 ~ 4.5 m, 高さ 50 cm 前後、
長さ 17 m 程の土
塁跡(図4)が残る
(急崖状の東側よりも、むしろ
西側縁辺に土塁
の備えが必要と
思われるが)。
また、削平地北
側は、明瞭に自
然地形と区分で
きる 2 m ばかり
の段差がある。
これを下ると北
端部の展望所に
出る。以前には、
この間に北の丸
と称する削平地
の所在がいわれ



第21図 芝山城跡概略図

ていたが、現在はあたりが果樹園(図5)に開墾され、削平地を確認する
ことができない。なお、注意を引いたのは、果樹園の下あたりから西側山腹を
南に向かう幅 1 m 前後の、かなり古い状況を示す通路が存在することである
(図8・5下方の点線)。それは、開墾地によって中ほどが途切れるけれど、
一応、南麓にかかる所へ出る。

従来、山頂部の削平地を南の丸、中央の広い削平地を指して本丸、今回確
認できなかったが北側のを北の丸と称してきた。やはり、中央の削平地は他
に比べ加工の度合もよく、本城跡では中心をなすものであろう。全体的には、
山頂部から段下りに配置した郭の在り方は単純で、さほど防御を主眼に

したものでない。反而、その在り方は北方内海を目指すものであると考えられ、郭の配置よりもこの山の立地の良さが、城構えの目的を達する必要十分条件を満たしているのであろう。

VII おわりに

中世山城においては、どうしても郭の繩張が、その立地する自然の山地形に制約される。それだけに、地形を最大限に利用して防備の十分を尽すわけであるから、そこには各個独自の要素がおり込まれることになる。

勝賀城跡においては、県下で著名な天霧城跡（善通寺市、多度津町、三野町に跨る）や西長尾城跡（溝濃町、綾歌町に跨る、長尾氏）、本築城跡（財田町、財田氏）、雨籠城跡（津田町、安富氏）などと全体的に類似するところ（防備の能率を高める階段状の郭の配置、要所に切通し状の遮断部や土壘・石壠を設ける繩張、これは中世山城において通有の形態であるが）をもちろん、本丸跡周辺の堀の繩張に極めて特徴的な性格を見出すことができる。その巧緻な城構えは、概観近世的ともいえる新しい要素を含んでいる。

しかし、本丸跡の試掘調査では鎌倉時代後半から室町時代中頃までの、すなわち、概ね中世期中半頃に係る遺物所見を得た。それは、城主香西氏の歴代を綴った「南海治乱記」・「南海通記」（香西成資著、前者寛文3・1663年、後者享保4・1719年）、「香西記」（新居直矩著、寛政4・1792年）などにいうところの初代資材の承久の乱後築城には相応するものではないが、本城跡はかなり年代的に遡る位置づけができそうである。

おそらく、多くの中世山城がそうであるように、改築・再改築の過程を含めて、一時期に係る築城ではなく、必要に応じて拡張増強する経過を辿り、現在にみる繩張や造作の状況に至ったのであろう。それにしても、本城跡では県下に他例をみないほどの土壠、石壠遺構が良好に残存しており、各部所ともほとんど後世の損壊を受けていないので、当時の繩張を一貫して知ることのできる中世山城跡の好例であり、貴重な資料を提供するものである。

ところで、今回の調査では、地形測量によって城跡全体の構造形式を正確に図化することができた。このことは、讃岐の中世山城のなかでは、先年実施された天霧城跡調査に次ぐものであり、今後の城郭調査や研究に及ぼす影響も決して少なくないであろう。

なお、本城跡については、今回の測量図で表現しきれなかった城跡特徴部分

の補測、郭をはじめ土塁・石塁などの構築状況の把握、佐料館跡・藤尾城跡など周辺諸城跡との有機的な関連性の検討、ひいては中世讃岐における香西氏と本城跡の歴史的位置づけ、など今後の調査研究に関する課題も多い。こうした事柄が論及されてこそ、本城跡の性格が十分に解明されるわけであり、今回の調査はその第1歩を踏み出したにすぎない。

参考文献

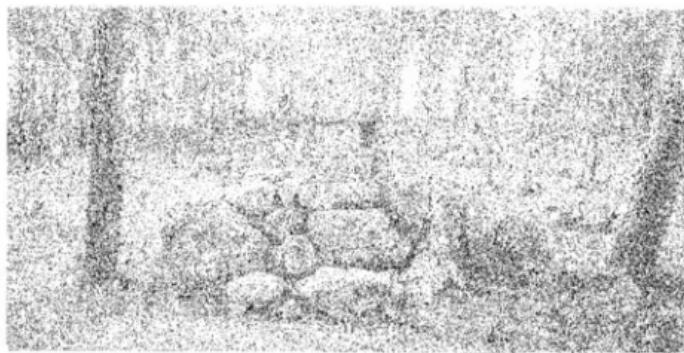
- 「天正年間香西氏居城古地図」香西寺蔵
香西成實「南海治乱記」・「南海通記」
新居直矩「香西記」
「佐料・香西堀引図面」高松市役所鬼無・香西出張所蔵
福家惣衛「香川県通史」
「新修香川県史」和田正夫・松浦正一ほか、香川県教育委員会
「香西史」岡田唯吉ほか、香西町役場
「香西氏の城郭」高松市香西観光協会
白川悟ほか「香川県の城」『日本城郭全集』
「天霧城跡測量図二百分の一」香川県教育委員会
黒板昌夫ほか「天霧城跡」多度津町教育委員会・一市二町天霧調査会
「讃岐人物風景」四国新聞社
内藤昌ほか「因説戦国城郭史」『歴史読本 隨時増刊'77-6』
村田修三「大和の城跡と国人」同上
小室栄一「中世の城・館跡」『新版考古学講座6』
　　「方形館難考」『探訪日本の城 別巻築城の歴史』
伊藤ていじ「城 燭城の技法と歴史」
日名子元堆編「城」日本の美術11
井上宗和「城 ものと人間の文化史」「日本の城の謎」日本史の旅5
「特集歴史時代の考古学」月刊歴史手帖第5巻4号
藤岡通夫「城 その美と構成」
間壁忠彦・間壁霞子「備前焼研究ノート(1)・(2)」「倉敷考古館研究集報第1・2号」
藤原雄・竹内淳子「備前」日本の陶磁3
葛原克人ほか「水の子岩学術調査報告」「海底の古備前」

図 版



勝賀山近景（南東山麓佐科山田池より）

図版 1



(1) 本丸跡の鶴神門(東より)



(2) 鶴神門より本丸木戸を見る



(3) 本丸木戸(外側東より)



(1) 三の丸跡から本丸・二の丸跡を望む

(2)

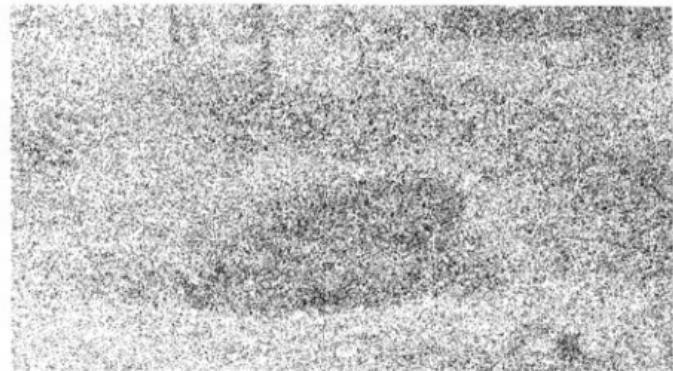
本丸土塁基部の石壁露出部分



(3)

本丸土塁西辺の曲折部分(北より)





(1) 本丸内井戸跡と称するところ
(西より)



(2) 二の丸跡東縁辺の石壁
(北より・後方本丸土塁)

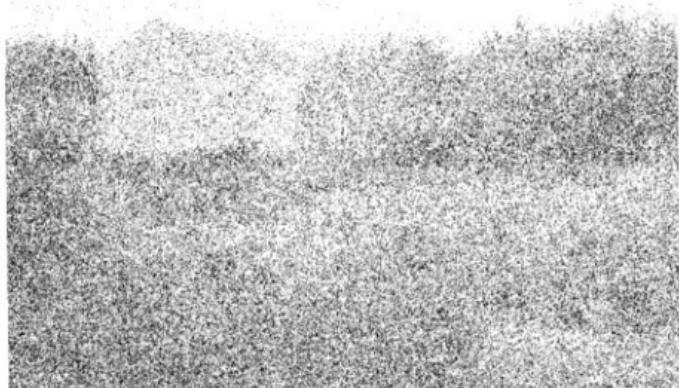


(3) 二の丸跡東縁辺の石壁(北より)

(1) 三の丸跡東邊の石壠（南より）



(2) 山頂部北側一段下った平坦部（南より）



(3) (2)の西側縁辺の列石状況



(1)

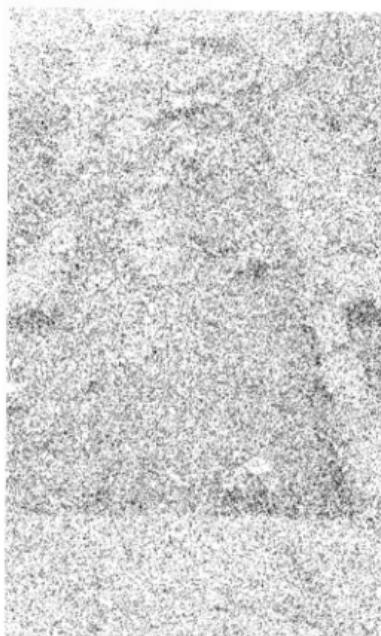
十九株式運前の青葉風景(北より)



(2) 試掘区の設定(北より)



(3) 4区試掘状況(北より)



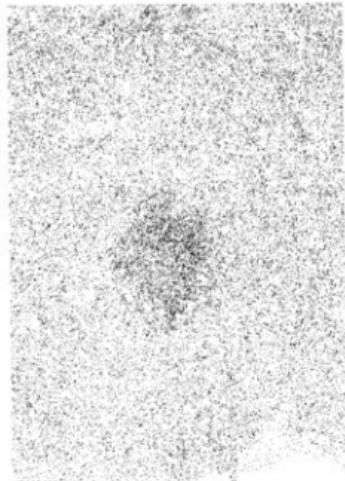
(1) E 区試掘状況(東より)



(2) E 区小穴周辺の状況(東より)



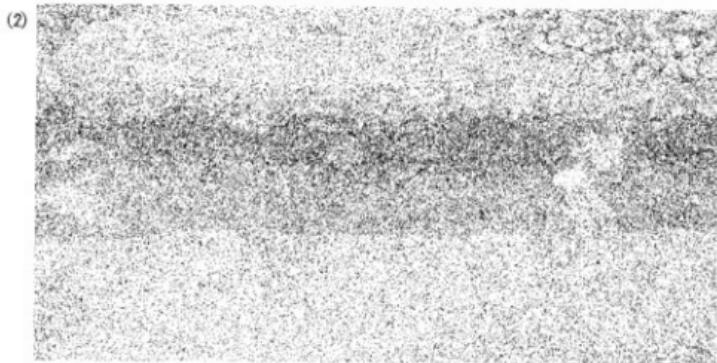
(3) E 区小穴内部の状況





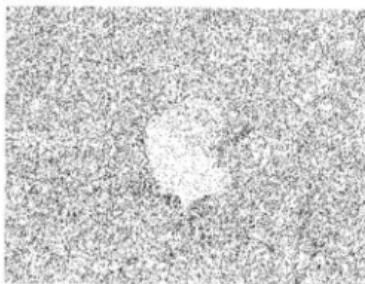
(1)

- (1) C～D区土層確認の掘り下げる状況(東より)
- (2) (1)の掘り下げる壁面の状況
- (3) C区掘削前焼壺口頭部出土状況
- (4) 6区掘削前焼壺頭部出土状況



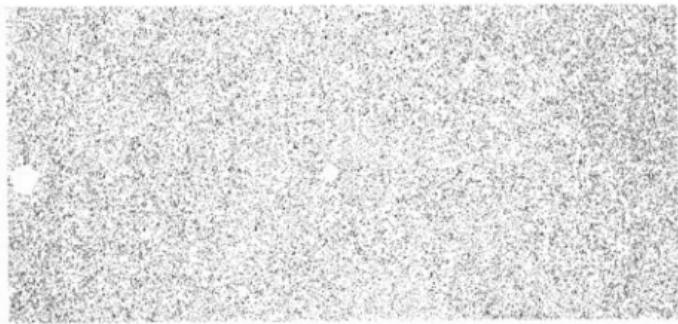
(2)

(4)



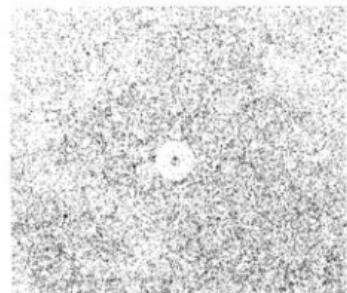
(3)





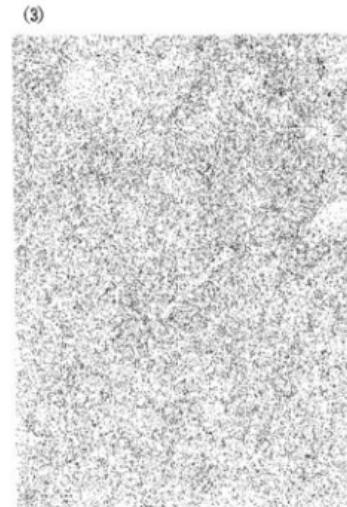
(1)
F区出土状況(北より)
(さく)

(2)



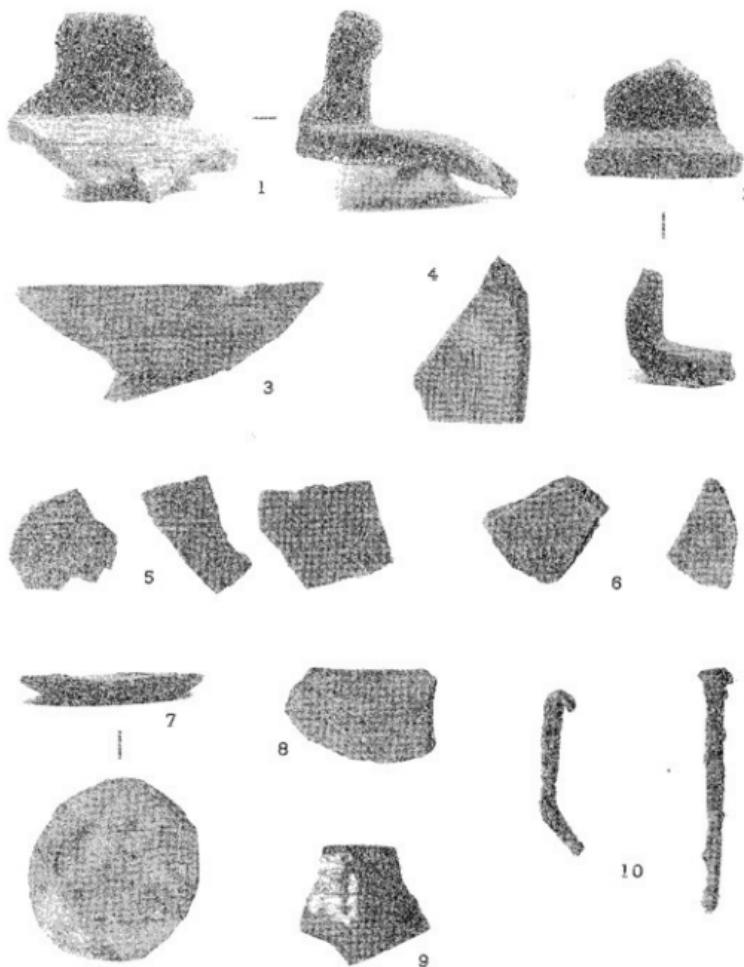
(2) E区朝鮮通宝出土状況
(3) F区鉄釘出土状況
(4) 試掘後の埋め戻し状況(南より)

(A)



(3)





試探調査の主たる遺物

- 1～5 備前焼（4.は摺鉢、他は盞片）
- 6. 上師質摺鉢
- 7. 上師質小皿
- 8. 土師質土鍋
- 9. 青磁
- 10. 鉄釘
- 11. 銅製留釘
- 12. 古銭（右の二つは治平元宝と鴎洋通宝）



勝 賀 城 跡

1979年3月31日印刷発行

編集・発行 高松市教育委員会
高松市番町1丁目8番15号

印 刷 オール印刷株式会社
高松市中央町18番4号